「フィロゾフィー・ジャポネーズ」という冒険

杉村靖彦

1 はじめに

二〇一三年三月、ミシェル・ダリシエ、永井晋の両氏と共同で筆者が編集したフランス語での日本哲学アンソロジー『Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps（日本哲学――無、世界、身体）』が、パリの哲学専門の老舗出版社であるヴラン社から刊行された。[1] 幸い予想以上に売れ行きがよく、早くも重版の話がもちあがっているらしい。原稿を出版社に提出してから、紆余曲折があり刊行まで六年近くを費やしたので、無事ここまで漕ぎつけたことがまだ半分嘘のようで、大きな感慨を覚えている。編者が三人ともこの宗教哲学会の会員だということもあり、当初は本書を当誌の書評欄でとりあげていただこうかと考えた。しかし、日本思想・哲学の主たるテクストをフランス語に訳出し、紹介文をつけてアンソロジー形式で編纂したこの種の本を、学会誌での書評という枠組の中で扱ってもらうのは、いささか無理があるようにも思われた。そもそもこの本が第一の対象としているのは、日本哲学に関心をもつフランス語圏の読者たちだということもある。

しかし、だからといって、本書を宗教哲学会の会員諸氏に向けて紹介することに意味がないというわけではない。近代以前の日本思想はもとより、西洋哲学の摂取を通して生まれた「日本哲学」の海外での紹介や研究については、すでに英語圏やドイツ語圏を中心に相当の蓄積ができていることはわが国でもよく知られているが、フランス語圏での状況はあまり知られているとはいえない。そうした中では、本書の紹介自体が意味のあ

る情報提供となるだろう。そのように考えて、自らの共編著の紹介というやや変則的な形にはなるが、研究ノートのコーナーをお借りして、この書について語ってみたいと考えた次第である。

ただし、単なる情報の提供や本の宣伝だけでは面白くない。筆者自身、この書の企画、編集、刊行を通して、そして刊行後の反響の一端を見聞きして、題名の「フィロゾフィー・ジャポネーズ」という術語が体現しようとする事象の一筋縄ではいかない性格をあらためて痛感させられたように思う。わが国における西洋哲学の翻訳と摂取を通して産み出された「日本の／日本的」という形容詞付きの「哲学」を、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」という旗印の下で翻訳し返し、そこで育まれた着想や概念を西洋哲学の言説空間へと投入しようとすること。この作業に含まれる奇妙な錯綜と、そこから生まれるリスクとチャンスこそが、本書のような著作の哲学的な面白さであるように思われる。以下、そのことが少しでも伝わるような形での紹介を試みてみたい。

2 本書の構成

本書はヴラン社の手がける「Textes clés（鍵となるテクスト）」叢書の一冊である。これは二〇〇五年に始まったシリーズで、哲学の特定の分野やトピックについて、主要テクストを取り集めてそれぞれに解説を加え、読者に全体的な知識を提供することを目的としている。言語哲学、環境倫理学、現代形而上学、心の哲学等、すでに二〇冊以上が出ているが、そこに突如として（?）「日本哲学」が加わったわけである。本書がこのような枠組みの下で世に問われたことは、けっしてどうでもよいことではない。たとえば、いわゆる「京都学派」の哲学者たちが海外に翻訳・紹介される場合、出版元や叢書は、東洋思想や仏教思想、日本学や比較文化論などを主に扱う所であることが大半である。京都学派の哲学者たち自身は、その思想の内実はともあれ、自らの思索を西洋的な意味での「哲学」という様式に則ったものとして性格づけていたはずであるが、外からの眼差しの下では哲学とは別のものとしてカテゴライズされがちだということである。このようなズレは、京都学派の哲学の海外での受容においてきわめて興味深い現象であり、それ自体が注意深く検討すべき事柄であると思われるが、本書の場合は、そうした趨勢とは逆に、西洋哲学の叢書の一冊として、主に西洋哲学の専門書を手がける書店から刊行されたわけである。このことは、当然本書の受けとめられ方にも反映してくるはずであろう。

だが、本書の目次を見ると、そこには「日本哲学」の名の下で、時代面でも性質面でも相当多様なテクストが収められていることが分かる。全体は四部に分かれ、合計十人の思想家の代表的なテクストを選んで、思想家の紹介に続いてそのフラン

ス語訳（部分訳）を載せている。内訳を記せば、第一部「日本思想のアルケオロジー」は、道元『正法眼蔵』（宮川敬之、アラン・ロシェ）、荻生徂徠『弁明』（中島隆博、エディ・デュフルモン）、本居宣長『直毘霊』（キム・テホ、エディ・デュフルモン）、第二部「明治期における西洋哲学の創造的摂取」は、西周「知説」（安孫子信）、中江兆民『三酔人経綸問答』（エディ・デュフルモン、西山雄二）、第三部「京都学派による哲学の体系化」は、西田幾多郎「働くもの」（ミシェル・ダリシェ）、田辺元「生の存在学か死の弁証法か」（杉村靖彦）、戸坂潤「性格としての空間――理論の輪郭」（望月太郎、津崎良典）、第四部「日本哲学の新たな相貌」は、井筒俊彦『意識と本質』（永井晋）、大森正蔵「言語的制作（ポイエーシス）としての過去と夢」（金森修）となっている（カッコ内は紹介・翻訳の担当者）。また、全体を通覧するための思想史的な見取図として、編者三人の手による七〇頁近くの「総説」を冒頭に配した。

率直に言って、筆者はこの構成に満足しているわけではない。当初の編者たちの計画では、京都学派の哲学者たちを核にして、その前後に明治期の西洋哲学受容と、戦後の独創的な日本人哲学者の成果を配するつもりであった。要するに、明治以降、西洋の「フィロゾフィー」が日本という非西洋の地に組織的に移入された結果遂げた創造的変容に的を絞ったアンソロジーを思い描いていたのである。これは、それ以前の時期まで組み入れると、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」という名称の外延が曖昧化して「日本思想史」一般と区別がつかなくなりかねず、哲学専門のヴラン社から刊行されるという強みも薄れてしまいかねないと危惧したからである。だが、出版社側は、「総説」で古代から現代までの日本思想史の流れを通覧した上で、明治以前、明治期、京都学派、戦後思想の四つの局面について均等に思想家を配分するよう求めてきた。この条件を受け入れて、なおかつ西洋哲学の非西洋における創造的変容としての「フィロゾフィー・ジャポネーズ」の全貌を紹介しようと思えば、本書のサイズの本（総頁数四七一頁）ならば二巻か三巻は必要になるだろう。せめて二巻本にできないかと交渉してみたが、予算の関係上無理だということだった。以上のような経緯から、本書は上に示したようなやや焦点のぼやけた構成にならざるをえなかったわけである。

実際、この制約の下で、どの思想家のどのテクストを訳して紹介するかを考えることは、適任の担当者を見つける難しさもあり、なかなか大変な作業であった。また、出版社からは、なるべくまだフランスで紹介されていない思想家を入れ、すでに紹介されている思想家についてもまだ仏語訳のないテクストを選んでほしいとの要望もあり、この点も調整に苦労した。たとえば、京都学派の哲学を扱う第三部で、西田と田辺に並んで和辻でも九鬼でも三木でもなく戸坂を取り上げ、西田と田辺についてもかならずしも彼らの代表作とはいえないテクストを選んだことには、こうした事情も関わっている。

3 フランス語圏の読者にとっての本書

しかし、編者側からすれば不満の残るこうした構成にも、フランス語圏の読み手の側に身を置いて考えてみれば、なるほどそうだったのか、と思えるような面もある。本ができてから海外での紹介のために全体をあらためて通読してみたり、海外の知人たちからいろいろと感想を聞いたりしているうちに、その点が少しずつ飲み込めてきた。

こちらが日本における西洋哲学の研究者として（これについては編者三人の間にもすでにズレはあるが、ここでは筆者の立ち位置の一面としてこう述べておく）、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」の魅力を西洋哲学の創造的変容として「哲学」の側から語ろうとする時、この「変容」の要因たる「日本」の方について直接論じることはどうしても難しくなる。そうすることによって、その「哲学」としての特異性が、ただちに「日本的なもの」の特異性へと還元されることを恐れるからである。

だが、私たち自身が、どれほど一面的な仕方であれ、経験や知識を通して「日本」について一定の理解と見識をもっているのに対して、この書の読者たちはそうでない場合の方が圧倒的に多い。だとすると、彼らが「フィロゾフィー・ジャポネーズ」のテクストを読んで、そこで「哲学」に加えられた独特の変容に興味をもてばもつほど、この変容の要因たる「日本」について少しでも多くのことを知りたいと思うはずである。今から考えれば、ヴラン社の編集部から編者たちに出された数々の注文は、そうした読者たちの立場に立って、彼らの要求を先取りするような形で出てきたのであろう。「フィロゾフィー・ジャポネーズ」をはさんで、執筆者たちがそこに息づく「哲学」へと読者を誘おうとし、そしてその試みが上手く行けばいくほど、読者たちはそのようなオリジナルな思索を産みだした「日本」へと興味を引かれていく。「日本」から「哲学」へというベクトルと、「哲学」から「日本」へというベクトル。相反するこの二つのベクトルがしかるべき出会いを果たすことができれば、そこからはたがいを刺激しあうことによって良い循環が形成され、両方向の理解が相関的に深まって行くという幸福な関係が成り立つであろう。本書の構成は、理想的にはそのような関係を志向するものだったといえるかもしれない。

4 「フィロゾフィー・ジャポネーズ」という危うい合成体

だが、少なくとも筆者自身は、本書の準備中に、本書が内包しているはずのこのような理想を十分に自覚化して仕事を進めることができなかった。出版社との交渉を一手に引き受けてくれたダリシエ氏から刻々と伝えられる先方の要望に対応しているうちに、ひとりでに現在の形に収まったという印象である。

本書のこのような構成がもちうる積極的な意味をもう少し早く理解し、読者に本書の読み方を伝えるようなメタレベルの指示を組みこめておれば、本書は読者にとってなお一層意義深い書物になったかもしれない。それを考えると残念でならない。

ただ、自己弁護をするわけではないが、本書を出会いの場とする上記の二つのベクトルの間に今述べたような幸福な関係ができあがるというのは、そもそも口でいうほど簡単なことではない。二つのベクトルがたがいに正反対の方向へと向かうものであるかぎり、両者がすれ違ったままに終わったり、たがいを誤解して出会い損ねたりすることはつねに起こりうることである。本書が「日本」についての記述を分厚くすればするほど、本書で紹介される諸テクストが担う「哲学」の普遍性志向を足早に通り過ぎて、「日本的なもの」の本質主義にからめとられてしまう読者が増えざるをえない（これが本書の構成に対して筆者が懸念を抱いた理由である）。また、これとは逆に、ヴラン社の出版物に親しむ西洋哲学に造詣の深い読者たちほど、自らのなじんだ哲学的概念や問題が新奇な変容を被っていることによる違和感に妨げられて、そもそもこれを「哲学」として読むという段階に進めないこともありえよう（筆者の経験では、これは海外の哲学研究者たちに対して「日本哲学」について語る者がまず最初に出会う抵抗である）。この両極端の間には、無数の様態のすれ違いや出会い損ないがありうるにちがいない。

「フィロゾフィー・ジャポネーズ」とは、結局のところ、このように散乱と混沌を内蔵した合成体であり、容易に統一像を結べない危うい存在なのだといえよう。そこでは、種々の誤解や無理解が誘発されてくることは避けられない。筆者たちのように「日本哲学」を「フィロゾフィー・ジャポネーズ」として発信しようとする者は、当然、こうしたリスクを事前に察知して計算し、可能なかぎりそれを避けようとするであろう。しかし、最終的には、誤解や無理解のリスクをとってあえて大胆に語り、それに対する反応を受けてまた新たに語り直す、というプロセスへと身を投じていくよりほかにない。それと引き換えにのみ、先に示唆したような幸福な出会いへとつながる数々のチャンスが生まれ出るのを待ち望むことができるのだろう。

その意味では、この幸福な出会いを「理想」と表現したのは適切ではなかったかもしれない。そもそも、本書の執筆者たちの誰一人として、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」の理想的な定型を手中に収めた地点から語りえている者はいない。ましてやフランス語圏の読者たちにとっては、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」というのは、まだ内実の定かならぬ、言葉だけの約束でしかない。結局のところ、少なくともフランス語圏においては、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」とは生成途上の、しかもかなり若い出来事であり、本書の刊行もその一齣にすぎない。この名称が担う約束が果たされるか否かは、今後この出来事がどのように展開していくかに掛っているのである。

5 「フィロゾフィー・ジャポネーズ」という冒険

最後に、本書刊行後に筆者が見聞きした本書へのフランスでの反応を少しばかり記し、この小文を締めくくることにしよう。本書の刊行後、二〇一三年六月二一日の『ル・モンド』の書評欄にロジェ＝ポール・ドロワ氏による書評が掲載された[2]。軽妙な筆運びだが、要所をきちんと押さえた優れた紹介文である。そこでは、本書で紹介した日本思想の流れが、神道、仏教、新儒教といった歴史的伝統の上に、明治期の大変動をはさんで西洋哲学の諸概念が一挙に移入された結果、単純に東洋的とも西洋的ともいえないような、むしろ直接的にアイデンティティを主張せずして新たな創造の場となるという「逆説的な固有性（spécificité paradoxale）」に至ったことが簡潔に確認される。このように本書の趣旨を正確に理解したからこそ、書評のタイトルにもあるように、書評者は「哲学の家族」に「フィロゾフィー・ジャポネーズ」が加わることを求め、そのことへの大きな期待を表明するのである。

ただし、こうした期待が、書評者にとってまだ確固たる裏づけをもたないものであることも確かである。「日本哲学の筆記試験があったとしたら、白紙答案が続出することを恐れねばならない」という書き出しから始まるこの書評は、最後にやや冗談めかして、本書を夏のヴァカンスのお供として携行することを読者に勧めている。持ち運びに便利な文庫サイズで、居ながらにしていろいろな思考の旅にいざなってくれる本であるし、おまけにこれを読んでおけば「万が一将来日本哲学の筆記試験があっても安心だから」、というわけである。要するに、本書が提示する「フィロゾフィー・ジャポネーズ」は、彼らの考える「フィロゾフィー」に新たな展開をもたらしうる興味深いものとして予感されてはいるが、その思想世界はなおヴァカンスで旅する遠い場所のようにイメージされており、フランスの哲学教育で「日本哲学の筆記試験」が課されるなどというのは現時点ではほとんどありえない想定だとみなされているのである。正確な現状認識だといえよう。筆者は先に、フランス語圏の読者たちにとって、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」はまだ言葉だけの約束でしかないと述べたが、この書評はまさにこの見立てを裏書きするものだといえる。しかし、書評者は少なくとも、この約束に含まれる可能性の大きさをきちんと受けとめてくれている。そのことに筆者としては強く勇気づけられた。

だが、約束にはつねに裏切りの危険がつきまとう。フランスのリール市の主催で二〇年来行われてきたシテフィロという哲学・文化イベントがあるが、二〇一三年の共通テーマの一つが「日本」だったこともあって、一一月に筆者も含めた本書の関係者たちが招待され、いくつかの企画に参加してきた。その最初のものが、ダリシエ氏と筆者が出演したフランス・キュルチュールのラジオ哲学番組の公開録音会であったが[3]、これは正

直にいって落胆の方が大きかった。筆者は以前からこの番組を時々聴いており、専門的な内容を正確に伝えようとする姿勢に好感を抱いていたのだが、残念ながらこの印象は大きく覆されることになった。「日本哲学」というだけで、番組の合間に入れる効果音に尺八の調べを用い、いかにも「東洋的」な詩句をナレーションで挿入し、大島渚の映画『愛のコリーダ』のワンシーンを流す。手練れのインタヴュアーの質問も、このあからさまなオリエンタリズムに引きずられてか、本書をあらかじめ読んできたにもかかわらず、的を外したものが少なくなかった。筆者としては、すれ違いの出所を明確化し、こちらのいうべきことを限られた時間でできるだけシンプルに伝えるべく努めたつもりだが、うまくいったかどうかは分からない。しかし、その後に続いて行われたワークショップでは、こちらに進行上のイニシアチブが委ねられていたので、かなり取り戻すことができたようにも思う。

いずれにせよ、リールでの一連の経験は、「フィロゾフィー・ジャポネーズ」をはさんで、発信者と受信者の間でどのような力学が働き、何が起こりうるかということの一端を目に見える形で理解させてくれたという点で、筆者にとっては大変貴重なものであった。「フィロゾフィー・ジャポネーズ」という冒険は、まだ始まったばかりであり、その進路はなお不確定である。そのプロセスにささやかながら参与する者の一人として、何ができるかを探り、何が起こるかを見すえながら、自ら自身の思索の糧にしていきたい。

注

(1) Michel Dalissier, Shin Nagai, Yasuhiko Sugimura (éd.), *Philosophie japonaise. Le néant, le monde et le corps*, Paris: J.Vrin, 2013, p.471.

(2) Roger-Pol Droit, « Dans la famille philo, je demande le Japon », in *Le monde*, le 21 juin 2013.

(3) この収録は、二〇一三年一一月一五日に、フランス・キュルチュールの哲学番組「Les Nouveaux chemins de la connaissance」で流された。その内容は、フランス・キュルチュールのHP上のアーカイブで聴くことができる。(http://www.franceculture.fr/emission-les-nouveaux-chemins-de-la-connaissance-philosophie-japonaise-l-ecole-de-kyoto-2013-11-15)